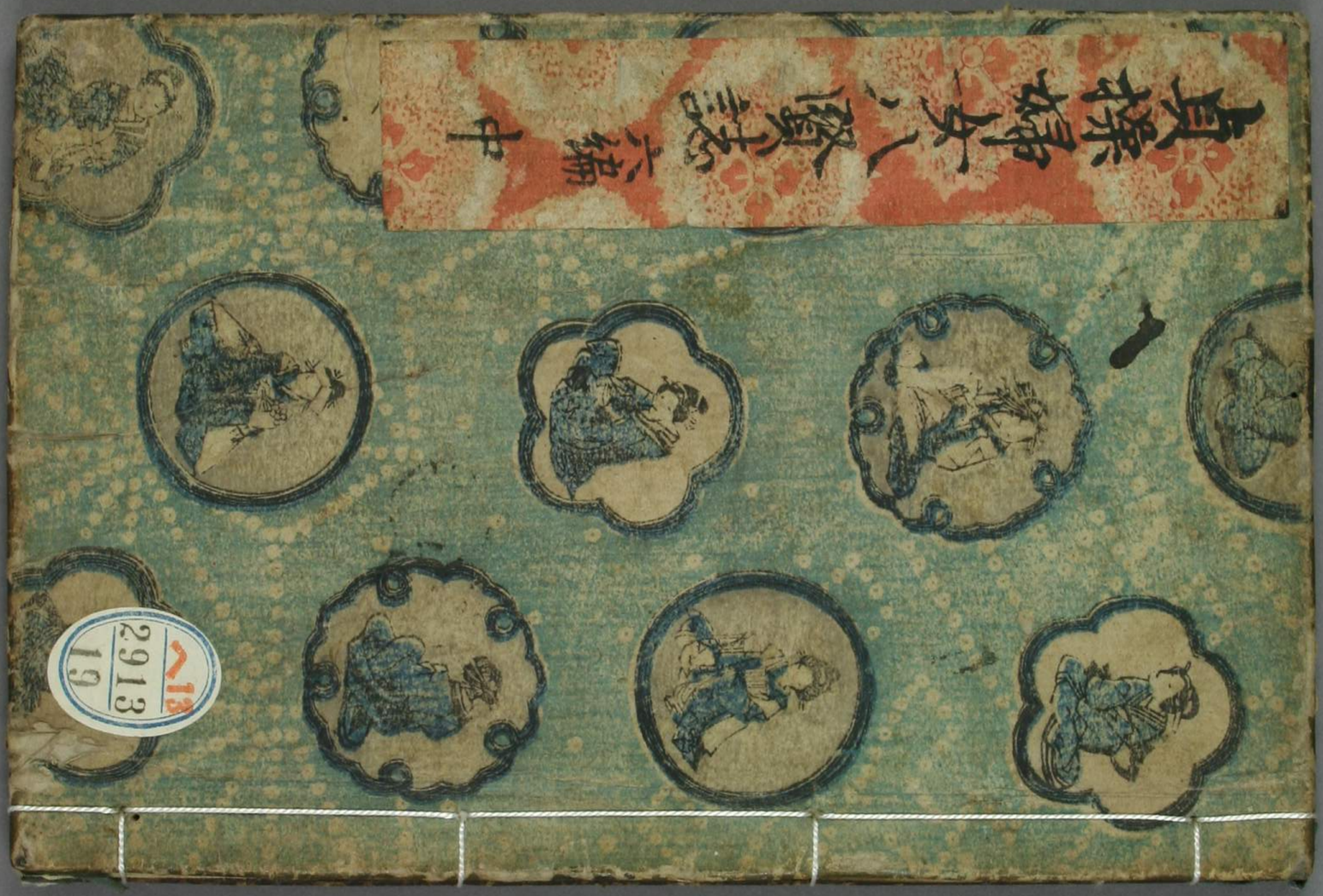
2913
19

へ13
2913
19
特

昭和九年
七月十八日

村田

貞操婦女八賢誌 八編中

東都 爲永春水編次

第廿七回

節を守て阿袖凶信を歎く
言を巧て少年淫情を迫る

再説有女太郎ハ嚮ハ鎌倉へ赴くしるべ飛脚の飯りゝを聞くよりも直さま一室へ呼び入れて動静甚麼ゆと索ねるゆゑお袖ハ辺もいそ〳〵と暖茶を温める火桶を出し側居て言語を侍程ハ件の飛脚ハ頻なる行を屢〳〵おゝ拭ひ小可ハ去給の七月梅太郎さまとやらの在まる方を尋ね来よとお憑を故ハ

須臾も猶豫せず先鎌倉へいそぐ程に左辺右
辺と名と年比とを心當へ尋ねても尋ねても或は梅次郎
梅之助など似寄の名前は聞出しても更へ梅太郎とい
名さえ聞くなど仮こそ此保帰りて人憑まさる田舎もの
猶も限なく尋ねんと東は金澤の果よりして西は大磯小田原
まで幾回となく駈めぐるうち何時しか秋も稍暮て冬も
中旬へ入りしなど更へ些の手掛りもなく尋ね佗つ又基の
鎌倉へいそしへ或人の話を聞けば今より十日程跡へ此先
なる客店へ泊り合せし若衆なりし其名も梅太郎とい

生國は武藏なるよし何ら索なる品なりしとて七月の頃より
逗留せしがつまづくの隣り合せし宿屋の處女と哄誘ひ
ちさ支えなり実となり何時しか處女は腹姙て親の耳
へも入るやうなどへ繰ひろしなど思ひけん那梅太郎へ娘を
伴ひ夜へ紛まて逐電しし今へ行衛は知れずと言へど
打続きしが疑ひの猶晴ざるべ件の宿屋へ泊りをこひ
ける金行くくしく那梅太郎が招子を聞しへ郷の的話へ
毫違いなど年頃とへ容貌まで尋ぬる人へよく似れば
偏家出して行くる先の知れるやせんと宿屋の奴婢なるを

種くゐ欺しゐ透しゐ問試さしゐたりさるさる女子の癖とを
一個の奴婢ゞ渝るゆう見ハ宮ゐ秘るゆるゆう竊りゐ
おん身ゐ報知しゆきん実、這方の嬢さゐゐハ他ゐ宮まる
聟ゞねゆうて近きゐ祝言為ゆハんと嫌て結納も受取
置しゐ那おゐ若衆ゐ哄誘さる懐姉身とゆうましゆゑ
今更祝言もゆりゞうゝ介とて此侭家ゐ逐てゐ聟
ゞのゐ言解ゐしと表面ハ逐電と言ひゆうて実ハ親公の
差圖にて津の國ゆる浪花の浦ゐ岱の由縁のゆるを憑て
二個を那地へ業しるゆう低ゆるゐ潭るゆゞと大ゆゆ大と

思へど猶その人を見ぬうちハうゐゐ帰りて箇様ゝと
お的話もゆりゞうゝ幸ひ他ゐ用るゆゆゆゞとより浪
花へ急きて又左辺右辺と索ねしゐ遠里小野の這方ゆる
此の人家のゆる所に郷の小室を購ひて其所ゐゐのびて
在るゆう知る者ゆりておしゝしゝゞ直さゐ家へ索ね
ゆき先外面よりさゝ覗き裡の格子を竊ゐゐ見るゐ年の
頃十七八の今業平とも言るゞき最艶しゝ氣ゆるお若衆と
二八ばりの美女ゞ火桶を中ゐきゝ対ひいと楽しゝ氣ゐ何
ゆハん呼ゝ情由ハ知きねども言話つきゆゆ形容まを東國

音ちと見しゆゑに偖ハ件のお若元が様て索ねる梅太郎
ゆゑ又那處女が鎌倉なる客店の處女なるうんと思へバ
御ら思按に及ばぬ案内を為ん内に入り小可ハ武蔵なる
忍が岡の辺りより遥く来りし者なるが同國夏塚の莊
官なりし李兵衛さまの養子なる梅太郎さまと貴公
さまに対ふ問ひしくば件の若衆ハうち駭き夫ハとだうり
口どもり須臾応もなうぞりしが何思ひけん形容を改めなる
わどおん身の言ひてどく吾清が梅太郎とのふ者なるが忍が
岡の辺りゆハ知己の人もなるし是ハ何ゆゑと問返さま

ば日外仰のひりしごとくお袖さまのお身の
うゑを偷盗くと譚まバ彼お若元ハ不具氣ふ打用遥く
武蔵より這所まで索ねて下さまとしを斯く言んハ氣の
毒なるゆゑ最初よりして那お袖ハ吾清が心ふ恨ハぬゆゑ雖
面しとも懲ざるふ慕ひてわど胸悪くまとゆゑ物ふくいけて
夏塚を逃出しふ猶も吾清が跡追ハてようるき家出をせし
ゆゑふ嫁なきお方のお世話ふなりおん身の迷ふまで勞せし
吉又返さくも氣の毒なるまども我夏塚ふひりし日ぶふ公ふ
協ハぬお袖より今ハ這地ふ身を落つけ見らるゝごとく渾家さ

ひるゐ何とて武蔵へ帰らるべき假令総角結い為ようとも
まづ祝言を為さでいるー又婚姻を為ようとも心ゐ協はぬ
女房なら離縁せすべき物でもなー吾済が支い思ひ絶
他の男ゐ身を寄るとも勝ゐゐ世よと斯言ひーと那ゐ言て
賜ふまーお袖といふ名を聞くさえも小胸ゐ障りて心地
よくなどおん身も敏く帰ふまとと取た端もなき返答ゐ小
可も呆まー斯る所ゐ居ハおそまとそそくー其家を
立去て種く思按を為て見ても又詮術もひらざるゆゑまど
まどとして立帰りふ最も面なき仕合と始終の招子を

潭るを聞ゐお袖い胸潰まー便りのひらくふ吉左右とよろ
こぶ甲斐も懐ろくー丈いつり他ー野の増穂の芒ゐ招
るまて何時ろ此身ゐ秋風の立ーまを初ら今日と俟ち昨日
と過ぎて飛鳥川假令ハ心替まーばとて親のゆるせー妹脊の
和合とー思ひ賜ふ斯難面ハるまーゐ今ハ情も難
波江の片葉の芦の片ぶり他ー男ゐ身を寄よ勝ゐゐ世よ
只あんまりな恐めーゐお根と流石の才女も意地ゐハ叶り
乱くー人目さへ憚らねて泣くー又打ちとちらさ口説て頻更
晴根もひらざりくー何思ひけん有女太郎ゐ片辺ゐおさまー服

有女太郎
たくましき
お袖を
憐む
有女太郎

あそび

差を急く取りて抜きたるし既に自害と視るゆゑ有女
太郎は打放き噫やとだうり拳を押へたる故の生言なるぞ
物のあや狂ひのもしらと禁るを聞くぞ頭をうち振り故とは
情るや逢ふ視ふ恋しの心の母せるく業の上ら
養ふはもし親の恩恵も余所ふして家出るしるのみ
お前ふさへも簡様くと最恥くしも変までも打明しゆ遂と
浪花の果まで此お人の索ねゆきろ難迫ふ在家を変と
ぐらとき音信でも聞夏ろとぐもしく我良夫の秋の扇と
捨らもし美濃の小山のひとら松獨りいつまで存命て

世ふ憂恥をさらもべき放して殺して賜ふまと言ひつくまる
のや取直を双と頼て奪て這方を向く有女太郎は
件の飛脚ふ目を睫ままべ飛脚はゆゆ得顔ふ獨り
竊くふ点頭くそうくふして出けり跡見送りて有女
太郎は静くふ双を鞋ふあるお泣沈みるお袖の顔をさし
視きく小勝を我る言ふく赴き理るもども死では花る寒
ひらぬ今私が言ふるをひを静あてよく聞もと響ふ飛
脚が憚るを側で関ぶふ腹立しき梅太郎が羅面き言話
況てお前のむでは無や口惜く思はもんと推量るど

痛まし〻就て種〻思ひ見るに梅太郎はたゞあらぬお前を
悪忌おもひの家出をもく逸速くも渾家を娶し
るらん今程情なき男と知りて他令総角結ハ為さうとも
まじ祝言を為さでいなし強面所支ふ操を立可惜命を
殺さうとて誰かお前を貞女と言ハん死ハ易く〻て生ハ
難し今死ぬ命を存命て強面き男の面當ふ由緒ある人ふ
其身を任せ適ま女夫と添遂て栄花を見るを乗しふ
今の恐をたらし〻め斯言つゞ何と申すお前の心もまぐ
わらぬふうちつけなる言ひ方なれど仮初なるら一稔近く

渾家よ所夫と人目のを喚び呼づまを他ふせで今ゝ実の
女夫となり生涯其身を任せめつゞ義理ふつるなる私も男なる
らぬ悪うい計らふまで昨日までも今日までも仮の妻婦と
思ふ私の素性も報ざりしを今ゝを賤しき身とハなる
賓ハ曾領家の内にて五百貫を賜ふる香場の某ぶ
一子ふて幼稚頃より召出さる君の小扈従を勤めしふ其
寵愛他ふこうして其後ふて成長び出頭をべき威勢なりしを
譖者の為ふ誣られて了に身の暇ハ賜ハるとも此身ふ侵せる
罪ハなし君の疑ひたる〻日ハ必ず帰参を許さるべし恐う

るときは私は武士お前はさすがづる奥さまと他の敵ひ尾
従を采配いたの侍るるは斯ては死ぬは増るうん貞女を立
るも人ゆゑ寄る強面がうあるも強面うゝ男は残さんよう
今のようの稲舟の否はのうぎぞは今日よりしてゝの底意うち
解て来の松山末うけて添遂る氣い在さぬう噫うどうゝを詭
寄べお袖は又も殃危の身はまうゝゝゝ心地ゝう腹立ゝくは
思へども一稔近く養つゝゝ享き恩恵もひるものを流石は離も
放さるぞ術よく此場を遁れんと思ふのうら娘氣のなと
忘ん言話さん泪は胸の塞がりて俯向脊を有女太郎が静め

無つうち含笑を恋のうらぬも死理をくねど義理も情も
矢へぬ男の夏をいつまでらくよくゝ男へるやはひる機嫌
直して今霄うら寶の女夫と男はまよ 回答のうらは不
兼知りのふくくと問ひ詰らゝ余のうは堪らねて捕れ
たるを掉拂ひお袖は形容を佶と改め其お言話は嬉ゝ
けゝども奈伯雑面人はもせよ親の許せゝ良夫を捨他ゝ
男は身を寄せて強面所夫は弥増る此身の不義は奈何を
らん死ぬは死うまれ命をう尼法師とも安をく生涯男に
虐あるぞ身を繋白はなさんより外は望はるさるものを今更

お前の渾家とやう後の栄花を示しめと云へ情ふ似て
情なし只此うふのお情に世身ふ眼を賜ハつて隨意放ち
楽りてよと言ふを這方へ吹ひのくぎ冷笑ひつく頭を打掉り
苦く其人了簡遠ひ驚て言ぐ梅太郎ぶ非命ふ此世を
去りしとふ音信でもなりしやう所夫の菩提を弔ふ
とて尼ふなるも吹へうぐ見をく男へ浪花ふて他し女を
渾家とやし是見よぐしふ暮をと言ふ正しき便を吹やう
お前だりうが物なりぐふ尼法師ふなるべとて梅太郎ぶ
何とう思ハんようきをせんようもを男へ

ふのゝ憎うも男をまド 低ても不ろと言寄うる奸智ふ東し
有女太郎ぶ脇の裡ととおそろしけ

第廿八回

錦籏の奇瑞賢女を走を
妮嬬の孤忠梟首ふ代る

休話再説お梅お道八代青柳の四賢女ハお理喜お友の
妮嬬と侶ふ瀬戸の躾ふ集會ゐし長潭うふ時殺
ア て曉近くなりし頃俄うふ陣鐘鯨波の声耳元ふ聞へ
嬢欲押寄ぬと思へふぞ六個の乙女いろひぐしく身ぐしく
さんとゝふ兎益の戰ひせんようハ遁ろし丈ハ遁ぎんと送ふ

意中を示し合ひまゝに明るくて暁の小暗き空を幸ひに若
門より密かに忍び出しに扇谷の駆兵等は遠くも此家を
補囲み道きんとせる乙女等が住方の路に立塞り這遂の
頭人と思しくて最ひくつけき一個の武士小刀の鞘当に身を
ろあしらひ衆を放れて我を出し晩に成る声をたゞ揚て此乙女等が
膽太くも昨日の殿の行列を乱妨なせるのみならず今宵
此家に集會なし尚管領家に讐せんと伎倆拙子の
速くも聞へ討隊に對ひし某に扇谷家の駆兵頭究果
千作光術と喚る者に逃んとそ逃まべき素性なる音

渡をも二つに引ひとりの恋を世よと言ふを道に所ひんぞ我ら出
つ打合咲を憶可笑氣なる雑言なる昨日洲崎の松原にそ
父の讐言なる定正を討洩せしに残念と思ふ矢先へ討隊の小
卒吾倅が相ふに見られども汝も讐の片割なるを爭ふ
許して帰をべき首を伸して乙女に似合ぬ高言を
憎さも憎しと駆兵等が女子と侮り備も立ぞ携なる十
ふを打振りながら吐と喚て飛びかゝるを乙女物くしと言つも
嘲るお道の後ろよりお理喜お友の妹嬢が竊ふに袖を引
止る勿体なしお道さる貴君に大変のお身なるに益なき戦ひ

撓べして可惜おん身の疵つくば後の悔も詮なくん這野
二女の御任せ申して貴君は自余の賢女等と一旦此場を立
退て何国の里にもおん身を忍び時のいるを待申さと言
ひく懐剣抜ひらめく近寄る敵をうち拂ひ前後左右の
斫立突立這所を最期と防ぎ戦ひお道をたづね四賢女を
後安く落さんと思ふ仏ハ知るものゝ四賢女も又お理喜ホの
必死を見捨て爭ひ落ぎ侶の殺んとまる折しも後方の
又敵ひりて其勢凡三十餘名各々得物を引携く賊夫等
何所へ逃んとまるや頃索受よと喚りつく武者声ひげて
寄せ合ける前後の敵の些も臆せぬ介ともも戦ひを好ひ
めらねば透もひらば落延んと且戦ひ且走りて一町ひきもも
退く折しも又ゆわ往方の伏勢ひりて先の我さ十名許り
各々鉄炮の筒先揃へ寄ば打んと俟ける重ねくし大尼
難の賢女等奈何る奇術ひりとも道は果べきもなけ
ども這所の必死を窺める六個の乙女いるくの聊る何容る
氣色なく些の少疲を負も厭ぐ群る敵の砕て入り右往
左往の駈回るを矢頃いよと伏兵等人覘ひきて鉄炮の
火蓋をきらんとまる折しも不思義や玉梅の懐より錦の

旗飛び出て虚空遥かに昇ると斉一黒雲俄かに舞下り
此旗を色めと思へども雲のうちに金龍現はる今明初め
東雲の空も忽地暗夜のごとく村雨さつと降下をゆぞ那伏
なら兵共ふ鉄炮の火縄も消さるゝのみならず思ひがけなき天変に
眼尺の間も視分ねば是いそも奈何と周章騒ぎ同志撃為も
爰ろけり四賢女は量らぎも此旗の奇瑞を見かうらふ嬉し
くも又勇まゝく先此間の何地へか馳り去らんと思へども如
法闇夜のひとゝけまぶ思ひくふ其場を遁さるる散くに落
行る其中にお理喜お友いたづめよりして四賢女を後安く

落さんと思へば一歩も退くぶ數箇所の痍疵を負ぐらも
御ん阿容しる柏子おく目に餘りする大敵を物とも思ぶ
砍て入り死力を尽して働く程に敵の新隊の加るのみ
弓鉄炮の准備ひまばやとく危く思ひしふ量らざりける
天変に黒白も分ぎ雨しぶば此間に四賢女の落ひし
奈何やと思へば尚も其場を去らぬ近寄る敵を盲討に薙
立砍立るうちに須臾ぐふ雲ぎまりさゝ昇りる旭
影に小高き丘に征揚り四下を伝と見まわるに遠四賢女へ落
ちと思ゝく群ぐる敵の其外に女子の影ぐに見へざるば今はも

錦旗懐を
[illegible]して
窮死を
解く

心安く送りの深痍を負ふて存命も恨ふまじく雑
兵どもの為ふて死恥をさらさんよりは先づ潔く自害せんと脇の
言ふまして妹も点頭の主の為に捨る身を今更猶豫する
ひるの覚悟ひまよ娘さんと言ひつゝ双を取直を二個が後ろ
窺ふ殿兵どもいと組付を右と左に投退り又近寄を
捻伏一其侭腰の押敷て双を咽に突立ゝ娘嫌迷
顔見合せ完全と笑ふて息絶へいと目覚しき最期かな
恁て扇谷の浪兵頭完栗千作光祈等尚も殿兵を驅
催一四賢女を追せ一ゝど速何地へか遁まけん了に影さ見へ

ぬ空一くも帰り来一ゝば此ハ詮術なし一人とて僅の
乙女等を捕逃せ一を上へ聞へば吾れ身のうるはしと竊に放
理喜お友等が死首を討落一顔の皮を搗剥て面体解らぬ
様ふ一お道お梅の首と言立音領家へ奉りしに最誠
一ゝ思せ一ゝど倘這首を贋首と其ハ四個の乙女を一個も
捕逃せ一なんど世に聞へば当家の武威ゆるゝ一ゝと
狂て二ッの首をもお道お梅に紛まゝ一洲崎の松蔭
へ梟ゝとり却てまゝ四賢女ハ不思義に危窮を遁るゝ
如法暗夜に紛一ゝば四個一處に集ふ恨ハ中に

お梅お道の二個ハ何所ぞ富とのゝよりねど東の道へと走り
泣く野嶌の磯辺ゑ来し頃ハ雲消旭さし昇て後方ゑ追ひ
来る敵もなけれバ片辺ゑひろ合ふ磯石ゑ二個ハ腰打
掛須臾労を憩るゆも心ゑろハ青柳八代又那ゑ理喜弟
妹嬶も落延るゝ整れしゑ思へど這辺ゑ猶嫌るさバ再び
討隊の追ひ迫らん左とも右とも這所まで来て今更他に
術もなし何れの家ゆも船を求め安房の須崎へ渡るとも武
蔵の柴浦ハ寄るとも順風ゑ任せて漕走らんと二個ハ意中を
呼合ひ艇て船公の家ゑひろ便船を乞ひけれども昨日洲
嵜の騒動と今朝まで瀬戸の戦ひゑ聞懼や為こうけん何れの
家も戸をとして喚ど叩けど応もせねバ奈何ゆやせんと視ろ
方ゑ繋ぎ捨る小船ひろ主ハ誰とも知らねども時ゑ乗て
幸ひと頓て二個ハ棄棹り纜さらと解捨て迭こゑ艫舵を操り
ゑぐら順風ゑ任せて漕行ゆとゑ其日の申の頃ゑ武蔵の柴
浦ゑ程遠くゑぬ品度の浦ゑ船へ入りぬ思ひ掛けぬ速さゑ
二個へ嬉しく岸ゑ登りて左辺右辺と見まハすゑ這辺ハ邊
鄙の浦なれバ漁人の家ひまども客店らしき家も見えず
物賣る店さへひろざことも飢労れる夏ゑまバ日ハ高くも

此辺りの海士が伏屋に思ひてありと一碗の飯をも乞ひ一夜の宿をも借らんもと儀辺に傳ひて往くかどの片辺の一軒の草の屋ひらりて裡に糸操る音のさるかぞ爰をと思ひて折戸を卒度押明て我を入れて案内を乞へば誰と応て操りけり糸を静かに置き端近ふ立ち出づる六十才斗の老女なるがお梅の顔を見るとうも貴君は神宮のお梅ぞと分かして這所へと問ひけれお梅は狭きまでくと老女の顔を打ながめ然う言ふ和女は夏塚にて日外吾婿を躯まりて深き恩恵を受けるのみぞお理喜お友が母なりと名

乗て参まで夏塚にて其老女とを則ち私まづは四無りの貴君のお駕籠に乗せ借屋きまで這方へと言ひて其辺片寄せて清備の花莚上坐へ敷並べる饗應振かお梅は更にお道さえ思ひがけなき面會をよろこびなどく坐ふ着けば老女はいそ〳〵暖茶をもて火桶を運びなどしてお道の顔を打ながめ氣ふ見るをお梅が和女はいまぞ知りて有らんと貴君は渋谷のお娘子お理喜お友が四主人なる阿道さえ在まるぞと言ひて再び駄く老女は貴君が四主人にて在せしと然うとも知らで饗

既禮はお免許いたしませと言ひつゝ頭を畳に埋め地
るをお道は所なくぢ打合咲ひつゝ形容を改めそんそら尊ふ所
及び〻那妬勝ち女と言ひしは和女ぐ変ふてひりーとする
思ひがけるとき今日の對面積る的話もあるものを誘先
這方へと言ひつゝも最臆ーゝ乱ふ見へふけり畢竟お道
老若三女が此白屋ふ面會して後甚麼多埋りるいる
并に復下の四つふ解分るを所ねゝ